

國學院大學學術情報リポジトリ

取り組みレポート 経済学部基礎演習の成果と課題

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 経済学部教務委員会 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002111

経済学部基礎演習の成果と課題

経済学部教務委員会

【要旨】

経済学部が平成27年度に行ったグループワーク型PBL形式の基礎演習は、学生に「自ら発言し他人の意見を聞く」、「大学への帰属意識を高める」という意識をもたらしている。しかし、教員の意思統一やファシリテーション能力、FAの能力差、受講生のフリーライター問題などの課題も明らかになってきており、その改善が必要である。

【キーワード】

初年次教育 アクティブ・ラーニング PBL

はじめに

- 1 グループワーク型基礎演習の紹介
- 2 グループワーク型基礎演習の成果
- 3 グループワーク型基礎演習の課題

むすび

はじめに

経済学部では1年次に配当されている「基礎演習A（前期、必修科目）」ならびに「基礎演習B（後期、義務履修科目）」において、平成27年度から一部クラスで受講生同士のグループワークによるPBLを中心とした形態を取り入れ、FA（Facilitator and Adviser）と呼ばれる上級生を各クラスに配置し、学生同士のピア・サポートを行っている。後述するように、学生への教育効果が高かったため、平成28年度からは全クラスで同形態の授業が展開されることになった。本稿では経済学部における初年時教育としての「基礎演習」の成果と課題について、FA制度にも触れつつ、その取り組みを紹介していきたい。

1 グループワーク型基礎演習の紹介

従来、「基礎演習A」、「基礎演習B」においては、学生が身につけるべき一定の項目（レポートを書く、レジュメを作成し報告する等）について共通認識を担当教員全員がもっていることを前提に、その授業内容は完全に各教員の裁量に任されていた。あくまでも各教

員個人の「やり方」が優先され、その結果として担当者間での「ばらつき」が目立ってきており、その点について学生からの意見も散見されるようになった。

そうした点を受け、平成26年度の基礎演習では試験的に数クラスが企業からの課題提供を受けてその解決に取り組むPBL形式に取り組み、平成27年度開講の基礎演習では全24クラスのうち15クラスで、統一シラバスに基づいたグループワークによるPBL形式の基礎演習を行うことになった。15名の教員は、平成26年度の取り組みに賛同した教員となっている。そして後述するように学生への教育効果が高かったため、全クラスで同形態の授業を展開することが教授会で承認され、平成28年度からは全23クラスで導入されている。

「基礎演習A」では大学生に求められる基本的なスキルについてグループワークを通じて学ぶことを目的としている。身につけるべき基本的な学修スキルとしてはノートの取り方、資料・文献の探し方、レポートの書き方等を挙げており、文献資料を正確に読み取り、自分の意見をもち他者に伝える（発表する）ことができるようになることが目標とされている。そうした学修スキルについてグループワークを通じ、毎回課される課題作成とあわせて学んでいく。学期中に「小プロジェクト」、「中プロジェクト」と呼ばれるPBLを行い、数クラスがまとまって合同発表会を行う例もあった。とりわけ「中プロジェクト」は後期に実施される企業からの与えられる課題解決授業の「予行練習」的な性格をもち、平成28年度の例では国学院大学生協の改善策提案と、経済学部が実施したビジネス・プラン・コンテストのテーマであった渋谷の観光について取り組ませるクラスとに大別された。

後期の「基礎演習B」は、企業から与えられた課題に対して解決策を立案する本格的なPBLとなっている。平成28年度はポッカサッポロの協力を得て、同社から提供された課題について取り組んでいる。10回程度、各クラスにおいてグループワークを行い、最終的に11月下旬ないしは12月上旬に、実際に企業の担当者を前にしてプレゼンを行う「プレゼン大会（PBLトッパーランナー國學院という名称を用いている）」を実施する。

「基礎演習A」・「基礎演習B」いずれにおいても、自己の「振り返り」を行うことにしており、自らの改善点を自己・他者評価を通じてブラッシュアップしていくことも大きな狙いとなっている。また、グループワークを通じてクラスメイトと交流し、授業についての満足感から國學院大學や経済学部に対する帰属意識も高めていく狙いもある。

平成27年度開講の基礎演習15クラス、そして平成28年度開講の全クラスにFAが導入されていることも大きな特徴のひとつである。基礎演習に配置されるFAは基本的に前年度に基礎演習A・Bを修得し、さらに1年後期に「経営学特論（リーダーシップ）」も修得した2年生の希望者から構成され、2月から3月にかけて2回の研修を受けている。FAは、ひとつ上の学年の身近な学生としての存在であり「クラスの雰囲気作り」に大いに役立っているとともに、各回のグループワーク時にはクラスのファシリテーションを行い、議論が停滞しているグループに適切な助言を与えるなどアドバイザーとしての役割を担っている。FAの存在は受講生にとって概ね好評を得ている。

2 グループワーク型基礎演習の成果

ここでは経済学部教務委員会が平成27年7月に実施した基礎演習A受講生に対するアンケート調査の結果から、グループワーク型基礎演習の成果をまとめてみたい。

表1および表2はそれぞれグループワーク型と非グループワーク型の基礎演習Aについての感想である。グループワーク型と非グループワーク型との間で顕著な差となっているのは「クラスの他の人の前で発言できるようになった」、「クラスの他の人の発表や意見が参考になった」という項目である。グループワーク型の肯定回答が非グループワーク型に比べて10%前後の開きが見られる。「大学が好きになった」、「経済学部が好きになった」、「物事に対する積極性が増した」という項目も肯定回答に5%前後の開きが出ている。毎回の授業でグループワークを行い、グループメンバーと意見を交わし報告を行うことで、「自ら発言し他者の意見を聞く」という能力が身につけていることを示している。さらに「物事に対する積極性が増した」という積極性もグループワーク型では大きな差となってあらわれている。また、「大学が好きになった」、「経済学部が好きになった」という肯定回答の差から、グループワーク型基礎演習は自分が所属する大学・学部への帰属意識を高めることにつながっていることと受け取れよう。経済学部という必ずしも積極的理由で進学されること少ない学部にとって、この点は意義のあることであろう。

基礎演習で満足できた点を聞いたものが表3である。ここでは満足できた点として「チー

表1 基礎演習Aについての感想（グループワーク型）

	とても そう思う	やや そう 思う	あまり そう 思わない	ま った く そ う 思 わ な い
クラスの友達ができた	63.6%	25.0%	5.5%	0.6%
クラスの雰囲気がよかった	52.3%	34.4%	7.1%	0.6%
大学が好きになった	22.7%	50.6%	21.4%	1.6%
経済学部が好きになった	19.5%	49.0%	21.4%	3.6%
クラスの他の人の前で発言できるようになった	30.2%	46.8%	14.6%	1.6%
経済や経営に関するメディア報道を意識するようになった	21.4%	45.8%	25.3%	2.6%
クラスの他の人の発表や意見が参考になった	45.8%	41.9%	4.2%	1.3%
勉強する意欲がわいた	16.9%	42.5%	28.2%	4.9%
物事に対する積極性が増した	20.5%	46.4%	22.1%	2.9%
自分の能力について考えるようになった	30.2%	40.6%	18.8%	2.3%
1年生後期の「基礎演習B」の勉強が楽しみになった	18.2%	39.9%	24.0%	7.5%
2年生の「専門演習（ゼミ）」に応募してみたくなった	38.3%	29.9%	18.5%	3.2%

表2 基礎演習Aについての感想（非グループワーク型）

	とてもそ う思う	ややそ う思う	あまりそ う思 わない	ま っ た く そ う 思 わ な い
クラスの友達ができた	54.9%	30.8%	5.1%	0.5%
クラスの雰囲気がよかった	42.6%	39.0%	7.7%	1.0%
大学が好きになった	19.0%	48.2%	16.9%	6.7%
経済学部が好きになった	17.4%	43.6%	24.1%	6.2%
クラスの他の人の前で発言できるようになった	22.6%	44.1%	19.5%	4.6%
経済や経営に関するメディア報道を意識するようになった	20.5%	48.7%	16.4%	5.1%
クラスの他の人の発表や意見が参考になった	30.3%	48.7%	10.8%	1.5%
勉強する意欲がわいた	15.4%	43.1%	27.7%	5.6%
物事に対する積極性が増した	15.9%	45.1%	25.6%	5.1%
自分の能力について考えるようになった	27.7%	44.1%	17.9%	2.6%
1年生後期の「基礎演習B」の勉強が楽しみになった	18.5%	37.9%	25.1%	8.2%
2年生の「専門演習（ゼミ）」に応募してみたくなった	29.2%	39.0%	15.9%	5.1%

ムワーク」という項目の差が群を抜いている。これもまた、グループワークを日常的に行っていることから「チームワーク」に対する満足感が高まるものであることは明白であろう。その他、「授業の内容」や「授業の進め方」の項目も満足感が高い。なお、本稿では紙幅の関係上扱っていないが、後期開講の基礎演習Bでのアンケート調査の結果でもこの「チームワーク」は顕著な差としてあらわれている。

表4は基礎演習Aの授業準備に費やす平均時間である。グループワーク型の学生の方が非グループワーク型の学生に比べ

表3 基礎演習Aに満足できた点（複数回答）

	グ ル ー プ ワ ー ク 型	非グループワ ー ク 型
授業の内容	39.0%	32.3%
授業の進め方	29.9%	21.0%
チームワーク	42.5%	20.5%
授業に必要な準備時間	8.4%	8.2%
クラスの学生	53.9%	47.7%
教員	42.9%	33.3%
時間帯	14.6%	21.0%
教室	19.5%	17.4%

表4 基礎演習Aの授業準備に費やす平均時間

	グループワーク型	非グループワーク型
0分	8.8%	36.2%
1～29分	28.2%	20.9%
30～59分	39.0%	27.6%
1時間以上	7.5%	7.1%

て準備時間が長い（＝勉強時間が長い）傾向がある。グループワーク型では次回に作業に向け毎回の課題作成（レジュメ作成）が要求され、「0分」という学習時間はあり得ないはずの数字である。学生に自主的な勉強を促すという観点でもグループワーク型の効果が出ている。

表5は経済産業省が平成18（2006）年に提唱した「社会人基礎力」の項目を挙げ、基礎演習の授業と関係すると感じたものを選択してもらった結果である。全ての項目において、グループワーク型が非グループワーク型を上回る結果となっている。あくまでも、学生が身についたということではなく、学生が関係すると感じたまでであることに注意しなければならないが、グループワーク型基礎演習をうまく運営していくことは産業界が求める「社会人基礎力」を高め、卒業後をも見据えた有益な教育手法であろうことが推測されよう。

以上のように、グループワーク型基礎演習は従来型のものよりも高い教育効果が見込まれることが分かり、経済学部は平成28年度からの全クラス導入という方針を打ち出すにいたった。

3 グループワーク型基礎演習の課題

学生に対して従来型に比べて教育効果が高いことは分かったが、運営をしていく過程でいくつかの問題点も露呈してきた。代表的なものをまとめてみよう。

まず、統一授業を行うにあたり、経済学部教務委員会が各回のモデル授業案を作成し、各担当者はその案に従い、各自が内容をカスタマイズしていくことになる。それに際し、前期に行う「小プロジェクト」・「中プロジェクト」、後期に行う企業からの課題である「大プロジェクト」のテーマを巡って意思統一が難しいという問題が生じている。従来は各教員が得意な分野で授業を設計していたのだが、全クラス導入により得意ではない分野・手法で授業を行わなければいけなくなってしまった。また、「企業」からの課題提供そのも

表5 次の能力の中で授業内容と関係すると感じたもの
（基礎演習A、複数回答可）

	グループワーク型	非グループワーク型
「主体性」	66.2%	42.1%
「働きかけ力」	45.8%	19.0%
「実行力」	51.9%	29.2%
「課題発見力」	45.5%	21.0%
「計画力」	46.4%	32.8%
「創造力」	32.1%	14.4%
「発信力」	55.2%	34.9%
「傾聴力」	55.2%	35.4%
「柔軟性」	45.5%	25.1%
「状況把握力」	36.0%	12.3%
「規律性」	33.8%	17.4%
「ストレスコントロール力」	13.6%	9.2%

のにも疑問の声が出た。教務委員会ではこうした疑念を払拭するためにも丁寧な説明を心がけたが、担当する全教員が一丸となって取り組む段階にまでは残念ながらいたっていない。今後の大きな課題である。

教員側の問題としてもうひとつ挙げられるのが、学生に対するファシリテーション能力の差である。ファシリテーション能力の有無によって円滑な授業運営が左右され、学生への対応に差が出てきてしまう。教員は必ずしもファシリテーション能力を身につけているわけではなく、こうしたグループワーク型基礎演習を新たに行う場合も一朝一夕にその能力を習得することは不可能である。次年度に向けて年度末の2・3月に研修会を2回開催しているが、全ての担当教員が最低限のファシリテーション能力を身につけて授業に臨んでいるとは言い難い。配置するFAによって補うと同時に、大学教育を取り巻く環境が変化してきていることを自覚し、自らが研鑽していく必要性に迫られている。

次にFAについての課題である。FAは新生にとって目指すべき上級生の「お手本」としての振る舞いが求められ、採用時にも留意して見極めを行っているが、やはり20名以上にもなると、その能力や意欲に差が出てきてしまう。定期的な研修会に加え、FAの自発的な勉強会等も行われているが、参加度合いにムラが生じてくるのは仕方がない。現在、より効果的な制度にすべくFAの組織化を目指しており、早急実現しなくてはならない。

最後に受講生についての課題を挙げたい。グループワークを行っているが、そうすると「フリーライダー」の問題が出てくる。個人プレーであれば、明らかにやる気がない、できない学生でそれなりの評価にしかならなかったものが、チームプレーになると全体としては目立たなくなってしまうとともに、他のやる気がある学生に悪影響を与える存在になってしまうのである。教員・FAがフリーライダー学生に対しどのように効果的に指導ができるのか、上述のファシリテーション能力の向上とも関わり、早急に対応していかねばならない課題であろう。

むすび

平成28年度より基礎演習の全クラスでグループワークを中心としたPBLが取り入れられ、さらに全クラスにFAが配置された。この効果については改めて詳細に調査・分析を行わなければならないが、受講生や担当教員からは（あくまでも肌感覚に過ぎないが）従来よりも概ね好評との感触を得ている。しかしながら、解決すべき課題も多く、学生のアンケートからは効果が上がっていると分析できるが、客観的な観点から本当に効果があるのかとはまだはっきりとした答えが出せていない現状がある。

教務委員会としては従来に比べて非常に大きな労力をかけて基礎演習の運営にあたり、様々な課題の解決にも迫られている。優先順位を付けてこれらの対応にあたりいかねばならない。

経済学部における初年時教育の改革は緒に付いたばかりである。この基礎演習の取り組

みが学生に成長を促し2年次以降の学びにつながり、大学教育を取り巻く環境変化にも対応できるよう不断の改善を行っていきたいと考えている。

基礎演習A・Bにおいて重要な役割を果たしているFA制度は「学部学修支援事業」によるものである。記して感謝申し上げる。

〈参考〉



グループワークに取り組む学生



授業中のFAの様子

Achievements and Problems of Freshmen's Seminar (*Kisoenshu*)

Academic Affair Committee, Faculty of Economics

Abstract : Faculty of Economics conducted a course called Freshmen's Seminar, employing the Project Based Learning (PBL) approach in 2015 academic year. The course led students to improve their attitudes to presenting themselves and listening to others, and the sense of belonging to the university where they were studying. There emerged some problems from the research, however, such as the teachers' varying abilities to consolidate their own purposes and facilitate their teaching, differences in the skills of facilitators and advisors (FA), and the problems of freshmen's attitudes towards their writing. It seems to be of importance for the faculty members to cope with these problems to make the target course more effective and meaningful.

Keywords : First year education ; Active learning ; Project based learning (PBL)